

▶オレンジリング
認知症の知識を身に付けた
認知症サポーターの証です



特集 認知症について考える あなたらしく笑顔で過ごすために

高齢化が進む現在。

高齢者の認知症は増え、将来、65歳以上の5人に1人が認知症になると予想されています。

高齢者に限らず、若年性の認知症もあり誰でもかかる可能性のある身近な病気です。

あなたは認知症についてどれだけ知っているでしょうか。

認知症になっても住み慣れた地域で暮らし続けることができるように、支え合いの輪が広がっています。

あなたがあなたらしく過ごすために認知症について少し考えてみませんか。

私の認知症介護体験

一緒に暮らしていた義母が認知症に。10年以上認知症を患う母を介護しながら
過ごした畠山さんにお話を伺いました。

「母が80歳になったころ言動がおかしいと違和感を感じるようになりました。その時は「ついに来てしまったか」という思いでした」と母を自宅で介護した体験を話す畠山勝榮さん。

症の母を受け入れるまで時間がかかったと言います。「ご飯を食べたくないと言った夜中に起きてくることや幻覚や妄想を話すこともありました。母の行動がどうしてもゆるせなく「困ったばあちゃんだな」と怒りをぶつけてしまった時もあったんです」と大変さやつら

さを話す畠山さん。しかし母から「なして困ったばあちゃんていうのや」と言われたときに、はっとして「母は悪いことをしようとしてこのような行動をしているのではない」と気づいたと言います。それからは、認知症の母を受け入れ、介護も楽しみながらと思うようになったそうです。

「私は夫が介護に積極的だったので助かりました。私が働いている間も農業をやりながら献身的に母の介護をおこなってくれました」と話す畠山さんですが、夫から少しずつ笑顔が消え一人で抱えこんでいることを感じ早期退職を決断。「介護は一人で抱えこんではいけません。家族や周りの協力が重要」と感じたと話します。

「退職後はヘルパーさんや行政の方に包み隠さず話を聞いてもらっていました。そこで笑顔になれたし、理解してもらえることに嬉しさを感じました」と周りのサポートに感謝している畠山さん。



母をサポートしてくれた看護師さんとの思い出の写真

介護体験を通じて皆さんに伝えたいことを伺うと「認知症はなりたくてなるものではない。認知症になった人に対して拒否しないこと。『ダメ』は禁句です。認知症になったからと言ってすべてを忘れるわけではないし、人としての心は忘れていません。また、地域の人たちにも隠さずわかってもらい、何かあったときに協力してもらえ体制をとっておくことも必要だと思えます」と話します。

「在宅介護は言い尽くせない苦労がありました。母に毎日「元気か」と話しかけた中で、ただ一度だけの「おかげさまで」という奇跡の一言が「自分たちらしい」介護ができたのかなと、すべてが報われた瞬間でした」と畠山さんは笑顔を見せていました。



介護体験を伺った畠山勝榮さん